

2025 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	理学部・化学科・1年
------------	------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

本プログラムを通して最も印象に残っているのは、食に関する文化の違いである。参加者全員で鍋を囲んでいた際、鍋に入っていた肉の骨が皿に収まりきらなくなると、当たり前のように机の上に直接置いている様子を見て、大きな驚きを感じた。日本では、骨などは必ず皿の上に置くのが一般的であり、机の上に直接置くことには強い抵抗感があるため、文化の違いを強く意識させられる出来事だった。

また、食事を残すことに対する感覚の違いにも驚かされた。中国では、十分な量を提供されたことを示すために少し食事を残す文化があることは知っていたが、実際には「少し」ではない量を残している場面もあり、日本の「食べ物を残さず食べるのが美德」とされる価値観との違いを実感した。日本では「お米の一粒に七人の神様がいる」と言われるように、食べ物に対する敬意が深く根付いている。

このような経験を通じて、文化によって「正しさ」の基準が異なることを学んだ。文化には科学のような普遍的な公式や理論があるわけではなく、どの文化であっても「文化だから正しい」と一概に言うことは難しいと感じた。同時に、文化を「理解すること」と「受け入れること」は別の段階であり、他者の文化を尊重しながらも、自分の価値観との違いをどう捉えるかが重要であることに気づかされた。

今後は、異文化に触れる際に一方的な価値観で判断するのではなく、背景にある文化的文脈を理解しようとする姿勢を大切にしたい。そして、文化の違いを受け入れる柔軟性と、対話を通じて相互理解を深める力を養っていきたいと考えている。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

このプログラムに参加したことで、専門外の知識についても学生同士の議論を通じて多角的に学ぶことができ、自らの視野を大きく広げる貴重な機会となった。特に、プログラムのテーマである「教育」については、普段の学びの中では深く考える機会が少なかったが、教育学部に在籍する学生も多く参加していたことから、異なる専門的視点を取り入れた議論が可能となり、非常に刺激的であった。

プログラム中に行われたある講義では、「理想的な講義の構築」をテーマに、従来の講義形態における課題が提示された。具体的には、講師が話す時間が講義の大半を占め、生徒同士の議論や主体的な学びの時間が十分に確保されていない点が問題として挙げられた。このような課題をもとに、「講師が講義中すべての時間話しているような授業形態は公正か否か」といった議題が生まれ、参加学生同士で活発な意見交換が行われた。

このような議論を通じて、教育の在り方や学びの形について改めて考えるきっかけとなり、自分自身の学びに対する姿勢にも新たな視点を獲得することができた。今後の学びにおいても、今回の経験を活かし、より広い視野で物事を捉えられるよう努めていきたい。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

今後 START プログラムに参加する方へのアドバイスとして2つ挙げる。一つ目は、積極的な会話、議論への参加である。会話や議論へ参加することで、それぞれの文化の違いや価値観の違いに気づくことができる。移動中や食事中、講義での議論中など、さまざまな機会にペアやグループなどで様々な人と話す機会があるため、それらの機会に積極的に話すことで、交流の輪を広げることができる。また、二つ目は、行きたい場所ややってみたいことを事前に調べておくことだ。今回のプログラムでは、放課後の空き時間や丸一日フリーな日があった。事前に行きたい場所ややってみたいことを事前に調べておくことで、フリーな時間を満喫することができる。

2025 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	教育学部 第一類 初等教育学プログラム
------------	---------------------

<p>(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか</p> <p>私はこのプログラムで、特に中国の教育システムについて学習したいと考えていた。その理由は、日本の教育が 100 年間変化していないと言われていたことに私は危機感を感じており、また、変わっていくために他国の教育制度について知って日本に取り入れていきたいと感じていたからだ。実際、今回のプログラムでは、教育に関する授業は合計で約 5 時間、教育に関連性のある、町の構成(人口流動や公園の在り方等)についての授業を約 2 時間受けることができた。これらの授業から私が考えたことは、日本の教育は無理に変わろうとする必要はないということだ。考えが変わっていった過程には、町の構成についての授業を教育についての授業より前に受けたこと、その後の教育に関する授業で自分の考えを見つめ直すきっかけになったという事象がある。</p> <p>町についての授業では、中国にいる子供の数に圧倒され、また、公園の使用は中国人にとって日常的であるということに驚いた。日本では、周囲の人が公園で遊ぶ子供たちの声がうるさいと苦情を言う、遊具が危険である等の理由から、公園の使用量が減少しているという現状がある。私は、これを改善するための地域のプログラムに中学生から参加しているのだが、中国の現状を知って、本来の公園のあるべき姿について改めて考えさせられた。しかし、この差というのは、中国の圧倒的な人口(特に子供)の多さと、日本の少子高齢化社会が背景として存在していると考えられる。これらのことから、教育を含めた中国の制度を日本でも取り入れようと考えた時、各国の背景までも注意深く観察するべきだということを実感した。加えて、急いで取り入れることは危険であると考えた。</p> <p>中国の教育システムに関する授業では、教員の役割について考えた時間が多かった。児童生徒にとって授業をより有意義な時間としてもらうために、教員はどのような立ち振る舞いで、どのような流れの授業を構成し、児童生徒に何を求め、期待するのか。これは中国だけでなく、日本でも唱えられている事象であるため、共通していると感じた。また、教員は授業のファシリテーターとして児童生徒をそばで見守り、時に軌道修正を行う必要があることも仰っており、日本で言われている意見と似通った部分があった。</p> <p>教員の考える理想の教員像について、中国人も同じようなことを考えているということを知れたため、今後はアジア以外でどのような背景からどのような教育システムが出来上がり、理想の教員像とはどのような姿なのかについて知識を深めたい。本でも知ることができるが、実際に自分の目と耳で体感しに行きたいとも考えている。</p>

(2) プログラム内容についての全体的な感想

このプログラムが、私の人生初の海外経験だったのだが、一言で言うと、今までにないほどの濃厚で毎分毎秒勉強になった9日間だったと感じている。中国ではないプログラムでは、広大生で動く時間が長かったと聞いているが、中国プログラムでは、BNUの学生と中国の他地域の学生、タイの学生と行動していたこともあり、様々な文化に触れられたことが良かった。

私は英語を学ぶことは好きだが、話すことはあまり得意ではなく、中国語もほとんどわからない状態だったため、最初は不安が大きかった。空港から大学近くのホテルに行くまでのタクシーでは、交通量の多さと、立ち並ぶアパートやショッピングモールの規模の大きさに圧倒された。学内では、広大以外の生徒の英語力に多少ひるんでしまっていた部分もあるように思う。しかし、このまま何もできずに終わることはしたくないと考え、弱気になり始めてから一時間後には自分から話しかけに行くようになっていた。午後には誰とでも話せていたように思う。これは決して自分の英語力に対して自信が持てるようになったわけではない。ただ、自分が思っているより他の人はオープンマインドで、多文化の人と話すことを楽しいと感じていることに気づいたからであった。しかしそれよりも前に、BNUの先生方や生徒スタッフの方たちが、私たちへのおもてなしをたくさんしてくださっていたことが心理的安心を生んでいたのではないかと振り返って感じた。特に授業や観光と、様々な部分で助けてくれ、不自由な生活を送れたことにおいては感謝の一言では表せない。ある子 BNU の生徒スタッフにありがとうと述べると、「私が広島大学に行ったときにも、大学の子が同じようにやってくれたから、それをあなたたちに返しているだけだよ」と言われ、とても胸が熱くなった。私も、彼女が私にしてくれたように、広島大学に留学してくれた生徒や、困っている人を助けてあげようと強く感じた。

活動は日中だけでなく、夜には行きたい場所に行き、やりたいスポーツをプレーした。とても広いバスケットコート、バレーコートそれぞれで、その場にいた BNU の留学生も交えた試合をたくさんしたり、おいしい中華料理のレストランに連れていってくれたり、とても大きな公園に夕焼けを見に行ったり、と一日全体が充実していた。最終日には、朝4時までホテルで日本と少しルールが違うカードゲームをした。長い間、ただひたすらにカードゲームを楽しみながらできるような仲間をたった一週間で作れたことが、私にとって最高の思い出でもある。

また、今回のプログラムで唯一私が他の広大生と違ったことは、ルームメイトが中国の生徒だったことだ。朝起きて、寝る直前まで英語で話すのは、私にとって大きな挑戦となったことには間違いない。しかし、中国と日本の行事に関する文化の違いや、その日の授業についてどのように考えたかを二人で長い間話し合えたことは、良い経験となった。

私はこのプログラム中、全力でチャレンジをし、全力で考え、全力で日々を楽しんでいたが、自分の英語力にも不甲斐なさを多々感じていた。帰国後から毎日英語と中国語、韓国語、スペイン語の練習を始めたため、次回はさらに質を高めていきたい。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

初めての海外でも、学校のプログラムで行くため、個人の旅行よりも安心感が違うことに加え、新しい学びを自動的に、自主的にも得られるようになっていく。私は、せっかく海外に行くなら、何かを持ち帰りたいという気持ちが大きかったこともあり、初めての海外に留学という方法で行くことに決めた。大正解だったと感じている。START プログラムは、何か国かの中から自分で選んで応募する形式だが、国を選ぶときには、行きたいという理由以外に、国ごとに学べる内容に注目した方がよい。興味のある内容が含まれている国を選ぶと、帰国した後の自分の人生や考え方に大きな変化や自信を及ぼしやすいと考えるからだ。費用面での心配については、START プログラムは単位を取得できることもあり、給付奨学金の対象となるため、多少は費用を抑えられる。他にも、アジア圏であれば、ヨーロッパやアメリカよりも費用がかからず行くことができる。留学は、自分自身の大きな成長になることに間違いない。行った際には、ぜひ何にでも全力投球、全力で新しい経験に挑戦してほしい。